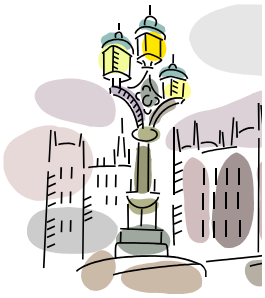
イギリス科ニューズレター

No. 18 / Sept. 2010

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館402号室)
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
Email: british@ask.c.u-toyo.ac.jp
Web Page: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/blog/



新主任ご挨拶

アルヴィ宮本なほ子

4月に、斉藤兆史先生から、イギリス科の主任を引き継ぎました。私自身は、イギリス科で学生生活を送りませんでしたが、大学に入って最初の英語の授業が、出淵博先生の授業(Northrop Frye の *The Educated Imagination*)であり、大学院の時に、出淵先生や山内久明先生の授業を受け、上記の先生方や中村健二先生がイギリス科の研究室で土曜日に開いていらしたロマン派の読書会に参加させていただき、山内先生には留学の時の推薦状まで書いていただきました。大事な時期にはいつも(イギリス科の学生でもないのに)イギリス科の先生方に大変お世話になりました。返しきれない学恩は、出来る限りイギリス科に返していく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度は、新しく武田将明先生(言語情報)が協力教員になり、冬学期には、小川浩之先生が着任されます。木畑洋一先生には、昨年に引き続き、非常勤で授業をご担当いただいていますが、冬学期には、卒業生の菅靖子先生に新たに非常勤でご出講いただくことになっています。教務補佐のアンジェラ・ダヴェンポートさんは2年目になりました。現在、学部生は15人(+AIKOM で留学中の学生が3人)、大学院生は10人程度います。今年度は、イギリス科に所属してヨーロッパコースでイタリアの研究をする4年生も2人いて、最初のイタリア語の卒論が2本出る予定です。

イギリス科の学生の生活は、イギリス科の良い伝統を受け継ぎ、「イギリス科研究室」を中心にまわっています。同じ学問領域に様々な方向から興味を持つ学部学生と大学院生が縦と横の緩やかな関係を持ちながら、「仲良く」「勉強する」研究室というのは、なかなか稀な存在ではないかと思いますが、助教や教務補佐が全体に目を配って、大学院生たちが学部生を、学部の3,4年生は、おずおずしていた2年の内定生たちを、上手に受け入れて独り立ちさせていく、という形で伝統の存続を担っています。

イギリス科の1年は、毎年山あり谷あり悲喜こもごも(学生も教員も)ですが、イギリス科の伝統を脈々と受け継ぎながらも、時代の変化の中で、学生生活も、以前とはかなり変わった面もあります。勉強、研究の環境は、非常に整備されましたし、AIKOM プログラムでの留学先も、イギリス科の学生はイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そしてアイルランド(中尾まさみ先生のご尽力で準備中)と行き先が多く、毎年複数の学生が留学します。外国の研究者の英語での講演、来日する大臣や駐日大使と学部生との対話集会にも、イギリス科の学生は積極的に出かけていき、昨今新聞などによく取り上げられる「内向きの日本の若者」とはかなり違います。その一方、就職の厳しさはイギリス科の学生にもしっかりふりかかっており、長引く就職活動の中で、今年は、例年6月下旬から7月上旬に行われる第一回の卒論中間発表会を7月中旬に延ばし、恒例の発表会後の一泊旅行を切り離して、夏休みの後半にしました。この夏の旅行は、3年生が企画し、大学院生や卒業生も参加します。夏の旅行が終われば、勉学の秋で、冬学期は、内定生を迎えたり、卒論の第二回中間発表会、卒論の口述といろいろ行事が続きます。私たち教員スタッフ一同、イギリス科の伝統の持続と発展を心がけ

て努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新任のご挨拶

武田将明

こんにちは。冬学期に「イギリス思想テクスト分析 II」（木曜 2 限）を担当する武田将明と申します。この 4 月に言語情報科学専攻の教員になりました。とはいえ、様々な知性がダイナミックに活動する駒場では、学科・専攻の区別が厳格ではないので、この半年、イギリス科のみなさんとお話する機会は何度もありました。いわゆる“extended family”のひとりとして、みなさんに多少の知的刺激を与えられればと思っています。

わたしは学部から大学院まで、ずっと 18 世紀イギリス文学、とくにダニエル・デフォーとジョナサン・スウィフトの作品を研究してきました。「イギリス思想テクスト分析 II」では、デフォーの代表作『ロビンソン・クルーソー』（1719 年）を、王権神授説と社会契約論、近代的な経済観念、植民地と宗教など、様々な思想的な文脈から再読するつもりです。

デフォーもスウィフトも、文学者であるだけでなく、同時代の政治経済について積極的に発言するジャーナリストの顔も持っていました。彼らの著作集を読めば、むしろ活動の比重は後者に置かれていたことが判ります。しかも、デフォーが『ロビンソン・クルーソー』を発表したのも、スウィフトがあの有名な『ガリヴァー旅行記』（1726 年）を出版したのも、ほぼ還暦を迎えたころでした。子供も楽しめる冒険物語が生み出された背景には、著者たちの何十年にも及ぶ思想的な蓄積があったのです。

ちなみに、この二作品と並んで 18 世紀イギリス小説の最高傑作に数えられるサミュエル・リチャードソンの『クラリッサ』（1747～48 年）、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョーンズ』（1749 年）、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』（1759～67 年）も、すべて作者が年齢を重ねたのちに発表されています。ここに挙げた作品には、感覚を直に揺さぶる表現こそ目立たぬものの、大らかなユーモアと豊かな叡智を見出すことができます。若くしてデビューするのが作家の才能の証であると思われがちですが、年齢を重ねなければ書けないものもあると実感させられます。

個人的な話題で恐縮ですが、わたしには、大学に入学したものの、何を専門的に学ぼうか悩んだ時期がありました。難解とされる思想書や前衛的な文学作品を読み漁り、最先端の研究をしようと意気込んでいたものの、前も後ろも識別できない人文学の暗い迷宮をさまようばかりで、目的地がみえず途方に暮れました。そのとき、息抜きのつもりで『ガリヴァー旅行記』を手に取ったのが運のつき、老成してみえる癖に心根は誰よりも熱い 18 世紀イギリス文学の渋さに心底魅了されてしまいました。博士論文では、デフォーとスウィフトの国家観について書きましたが、まだまだ論じること、考えることがありそうです。

怜悧にして博識な、時代を代表する知識人が、一生をかけて、ときには命を危険にさらしながら（デフォーは筆禍で投獄されましたし、スウィフトも要注意人物として政府からマークされていました）考え、発言した事柄の結晶といえるのが、『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー旅行記』です。研究を始めて二十年も経っていない私にどこまで理解できるのか、まして授業でその魅力をどこまで伝えられるのか、心許ない気もします。ですが、18 歳のころ、深夜にふと『ガリヴァー旅行記』を手に取って、稲妻に撃たれたようなショックを受けた記憶は、いまも色褪せていません。この記憶を頼りにしつつ、みなさんと共に『ロビンソン・クルーソー』を読み返すならば、18 世紀イギリス文学を通じて、イギリス文化、さらには近代という時代の様々な問題を考える新たな鍵が得られるものと思っています。よろしくお願いします。

イギリスで腎臓結石と闘うの記

斎藤兆史

4月から研究休暇をもらってロンドンに滞在している。昨年度までイギリス科の主任を務めてはいたが、ビザ申請の段階から戸惑うことばかりであった。とはいえ、イギリスに落ち着いてみれば馴染みのあることも多く、文字面での勉強も無駄ではないことを実感している。さらに私の場合、耳学問にも助けられている。イギリス人からイギリス通と思われている節もあるが、私は面談や卒論発表会で得た知識をひけらかしているだけである。しかしながら、私の在任中に National Health Service（NHS）の研究をする人がいなかったこともあり、医療制度は死角であった。そこをぐさりと突かれた。

イギリスに着いて間もなく、背中の左側に激痛を覚えて目が覚めた。まさに

ぐさりと来る、差し込むような痛みである。受け入れ大学の友人に助けを求め、まずは登録を済ませたばかりの一般診療所で診察をしてもらった。そして、泌尿器科の専門医を紹介してもらうことになったのだが、NHS にするか、個人病院にするか、It's up to you みたいなことを言われた。どのくらいの違いがあるのかわからず、体の叫びをそのまま言葉にした。「一刻も早く、一番いい治療をしてくれる病院を紹介してください！」

同日、指定の時間に紹介された個人病院に行くと、すぐに専門医に診てもらえた。問診が始まる前、医者は請求書にさらさらと問診料£300と書いて渡してよこした。その後、尿検査、血液検査、CT 検査を受け、日本円にして 20 万ほどの診察費を支払った。その日のうちに医者から電話があり、左の尿管に結石がある、うちに腎臓結石の専門家がいるからまた来いと言う。たしかに対応は早いが、また来いと言われたって、1 回の診察で 20 万もかかるような病院に気軽に出かけていけるものではない。しばらく様子を見ると言って言葉を濁し、また一般診療所に行って、今度は NHS の大病院を紹介してもらった。

さて、日本で病院を紹介すると言えば、紹介状を持って別の病院に行くことになるが、イギリスでは手順が違う。一般診療の医者が大病院を紹介する場合、一般診療所から大病院に連絡が行き、患者は、大病院から郵送による連絡が来るのをひたすら待つのである。私の場合、後日届いた手紙に記された診察日は、大病院を紹介すると言われてから2カ月近くあとであった。NHS では、国が医療費を負担する代わりにこういう問題がある。

そんな中、ある語学文学番組の制作を依頼され、イングランドをめぐって作家や作品ゆかりの地を取材することになった。ロケ当日までに石が排出されることを願ったが、それも叶わず、鎮痛剤持参で臨むことになった。ディケンズゆかりのロンドン、オースティンゆかりのチョートン、ハーディゆかりのドーチェスター、イシグロの小説に登場するソールズベリー、その近くにあって、『テス』の最終部に登場するストーンヘンジなどをめぐり、幸い、体調を崩すこともなくロケは終了。それから1週間ほどして待ちに待った大病院の診察日が来たが、もう一度 CT 検査をしたほうがいい、というのが結論であった。

その直後、日本に一時帰国することになり、この機会に東大病院の泌尿器科を訪れたところ、懇切丁寧な診察を受け、石はすでに排出されているようだとの診断に安堵の胸を撫で下ろした。痛みが消えたのがいつかと考えてみると、ストーンヘンジを訪れた直後。とすると、同じ「ストーン」だけに、結石が引力に引かれて出たのか、それともストーンヘンジが本当に世に言う「パワー・スポット」なのか、そのあたりは不明だが、あまりによくできた話なので、ついついこんな風に語りたくなってしまうのである。

卒論整理を担当して

梶元亮輔

（2009 年度卒）

卒論を提出し終えた 1 月中旬、残り僅かのイギリス科生活で何か形に残せるものはないか、と考えていた折に打診していただいたのが、卒論整理の作業でした。整理といっても、従来封筒に入っていたものを取り出し、ファイルに綴じ直し、背表紙となるラベルを作成・貼付し、完成したものを年代順に並び替えるだけの簡単な作業でした。しかし、イギリス科の歴史の分だけ、卒業された皆様の分だけ蓄積された卒論はゆうに 300 本を超え、データの整理なども含めると3週間を費やすこととなりました。

この3週間を振り返って今、思い浮かぶ言葉が一つあります。それは、DNA です。私事ですが、7月に会社の新人研修期間を終えました。そしてこの4ヶ月に及ぶ研修期間を通して取り組み続けた課題が、自社の「DNA」を追究する、というものでした。そしてこのDNAワークにおいて、最初から最後まで付きまとった難題が「会社のDNAとは何か」という問題でした。創立以来脈々と受け継がれてきた伝統、度重なる存亡の危機を乗越え生き残ってきた事業特性、あるいは歴代社員が共通して重んじ続けてきた信条、など様々な候補が挙がりました。これらを鑑みるに、「時代を超えて継承」され、なおかつ「時代に適応・進化」してきた「共通項」といった性質が、会社というコミュニティのDNAには必要であろうかと思われます。

こうしたDNAを追う思考に浸りきってきた4ヶ月を経て、改めて卒論整理の日々を想起するに、卒論というものに「イギリス科DNA」の影を見たように感じます。卒業論文という具象物がDNAであるという言い方はやや逆説的かもしれません。しかし、タイプライターがワープロ、パソコンと進化し、選定されるテーマが地域的にも分野的にも実に多様化し、近年では英語による口頭試問が導入され、当事者たる学生と指導してくださる先生方が絶えず入れ替わっていく中にあっても、その全てのイギリス科の歴史・人々が共通して持ち続けてきたものこそ、卒論です。

しかしながら、卒論というものは多くの学部・学科で設けられている制度で

す。DNAを考える上でもう一つ重要な要素は、「本質をついている」という点です。それがあるからこそイギリス科である、或いはイギリス科であるからこそその特質を持ち続けてきた、といった具合に、双方向で本質・独自性を担保するものこそが、イギリス科DNAとして真に相応しいでしょう。

このように考えてみると、イギリス科DNAの所在は、具象物としての卒論の中に込められてきた「精神」に求められると思われます。論文のテーマや内容などは勿論独自なものでしょうが、卒論執筆に個々人が寄せた思い、執筆を支えた精神といったものは、より一層独自なものなのではないでしょうか。私にとってそれは、「自分を書き尽くす」ということ、そして「先生の思いに応える」ということでした。

「卒論」という器に託して、これまでずっと受け継がれてきて、そしてこれからも受け継いでいってほしい何かが、イギリス科に脈々と流れ続けてきたはずです。それが一体何なのかは実際に一つ一つの卒論を手に取る中で、或いは先輩方とお話をする中で見えてくるものでしょう。その全てを知ることは無理かもしれませんが、あの卒論が納められた整理棚が後輩達にとって、一つの寄る辺であって欲しいと願います。そしてこれからも、ひとりひとりが自分らしく、イギリス科らしく、卒論に取組んでいって欲しいと思います。

自身としてイギリス科卒論を残すだけでなく、こうして全てのイギリス科卒論に関わることができたこと、そして愛するイギリス科に足跡を残す機会をいただけたことを誇りに思います。有難うございました。

同窓会開催のご報告

去る2009年11月14日(土)、東京大学ホームカミングデイに合わせてイギリス科同窓会が催されました。当日は、18 回生の木畑洋一名誉教授による講演会「『長い20世紀』の世界史像」に引き続き、50名以上の同窓生、新旧教員、現役学生が集ってなごやかに旧交を温め、また世代を超えた新たな交流を深めました。安西信一准教授率いるジャズバンドに斎藤兆史教授や学部生の渡邊秀介君が加わった素晴らしい生演奏が会に彩りを添えました。

2010年度ホームカミングデイのお知らせ

来る11月13日(土)に本郷、駒場両キャンパスで、第9回ホームカミングデイが行われます。詳しくはホームページ

http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/

をご覧下さい。

イギリス科研究室(駒場キャンパス8号館4階402)でも、例年通り、午後4～6時頃にかけて、お茶や軽食などを用意して卒業生の方々をお迎えいたします。(詳細は、10月半ばよりイギリス科ブログ http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/blog/ に掲載予定です。)

事前予約は不要です。お誘い合わせのうえ、お気軽に足をお運びください。皆様のお越しを心よりお待ちいたします。

ニューズレターの電子化について～お願い～

イギリス科では、今年度より経費節減と環境への配慮から、ニューズレターの電子化を開始いたしました。同窓生の皆様にも、すでにメールアドレスをお届けいただいている約3分の1の方には、このニューズレターから電子的にお送りしています。今回紙媒体でお送りした方の中でも、電子化にご協力いただける方は、どうぞメールアドレスを、ニューズレター送付専用アドレス igirisuka@ask.c.u-tokyo.ac.jp (研究室アドレスとは異なります。ご注意下さい。)までお知らせ下さい。また、お届けいただいているご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)に変更などがおありの場合も、お手数ですが、こちらまでご連絡いただければ幸いです。

一人でも多くの方のご協力を、お願いいたします。

2010年度イギリス科運営委員

アルヴィ宮本なほ子(主任)、西川杉子(副主任)、後藤春美、小林宜子、斎藤兆史、中尾まさみ、山本史郎、Angela Davenport(教務補佐)